フリードリヒ・シュレーゲルの「超越論的」の概念

胡　屋　武　志

フリードリヒ・シュレーゲルが生涯において残したテクストは膨大であり，その思想の内容は多岐にわたっている。本発表の目的は彼の思想を1796年から1801年までに限定し，特に「超越論的」という語に焦点をあてることによってカント思想と比較しながら浮かび上がらせることにある。

カントは『純粋理性批判』の中で「超越論的」という語を「対象に関する認識ではなく，対象認識の仕方に関わる一切の認識」と規定し，超越論的・反省的な理性批判によって理論理性の使用を自然科学や数学の領域に制限し，神への接近を知の領域ではなく行為・信仰の領域に委ねる。一方，「超越論的」という語を「観念的なものと実在的なものの結合或いは分離に関係するもの」と規定するシュレーゲルはカントの批判哲学にある認識の反省性を評価しながらも，彼の超越論的哲学の消極性に異議を唱え，哲学に「積極的なもの」を導入しようと試みる。なぜなら，シュレーゲルにとって知は無限であり，知の領域において無限者（神）の認識は決して断念されるべきではないからである。このような思想の差異は両者のパラドックスの捉え方に端的に表れている。つまり，カント哲学においては，神，自由，魂の不死についての論題を扱う際に理性がパラドクシカルな二つの命題を導出してしまうがゆえに，すなわちアンチノミーに陥るがゆえに，理論理性による神の認識は不可能とされ，その意味でパラドックスの役割は消極的・否定的契機にとどまる。それに対して，シュレーゲルにとってパラドックスは「すぐれていると同時に偉大であるもの」であり，ゆえに「それ自身矛盾していないいかなる命題も，いかなる書物も不完全である」。

カント哲学における「歴史の無知」を指摘し，「本当ならアンチノミーはカントをして無限者の断念ではなく，矛盾律の断念へと駆り立てるべきであっただろう」と述べるにいたるこの時期のシュレーゲルの思想の基礎にあるのは，『ギリシア文学研究論』(1795) に見られるような，近代世界を「無限の進展」という変化の相の下に捉える歴史認識であり，フィヒテの知識学に記述された，認識主体と認識対象とのパラドクシカルな関係，すなわち「反省の内的自由」を自身の思想に取り込むことによって認識主体と認識対象の自由な対話の理念としてイロニーなる態度が提示される。ときに「自己創造と自己破壊の不断の交替」とも言い換えられるイロニーは，ソクラテスがプラトンの対話篇で示すように，本能的にして思慮深く，冗談にしてまじめであり，無邪気に開かれながら深く偽装されているという，きわめてパラドクシカルな態度であるが，認識主体と認識対象による有機的な対話はこうしたイロニーによって目指されることになる。